権田直助関連二題

東京都羽村市　山口正義

草莽の志士、あるいは草莽の国学者・権田直助。多くの史料と、多くの解説資料があり、今更何を述べるのかと思われる方も多いのではないかと思われる。

ここに述べようとする二題は、いずれも直助を直接語るものではなく傍証的なものである。一題目はたまたま見た「薩邸事件略記」の成り立ちに言及するもの、二題目は直助宅に宿泊して周辺を尋ね歩いた紀行文の紹介で既に公知の事実の内容。筆者にとって偶然知った二題は新鮮な内容であった。共に一般にはあまり知られていない資料と思い、少し述べさせて頂きたい。

一、八王子市郷土資料館の「薩邸事件略記」

（一）「薩邸事件略記」に遭遇

八王子の住吉神社（片倉城跡公園内）にある算額を見学した帰り道、何気なく八王子市郷土資料館に寄ってみた。そこで展示内容をガラス越しに見ていると、突然ある資料の冒頭部分に釘付けになった。そこには次のようにあった。

「小嶋満将落合直亮権田直助等ハ同主義ノ為メニ無二ノ親友…」

筆者は権田直助に関して多くを知っている訳ではないが、このような資料が展示されていることに驚いた。資料名は「薩邸事件略記」[1]とあり、「江戸薩邸略図」とともに展示されていた。脇の解説には「慶応三年（一八六七）十二月、討幕派は武力討伐のきっかけをつくるため、江戸薩摩藩邸を拠点に江戸市中の擾乱を計画し、さまざまな挑発行動に及んでいた。それに対し、幕府側が浪士討伐を決定し、薩邸を襲撃、焼き討ちに及んだ。このとき、薩邸の浪士隊副総裁が落合直亮（なおあき）で、事件の模様を綴ったものが、『薩邸事件略記』『江戸薩邸略図』としてまとめられている」とあった。

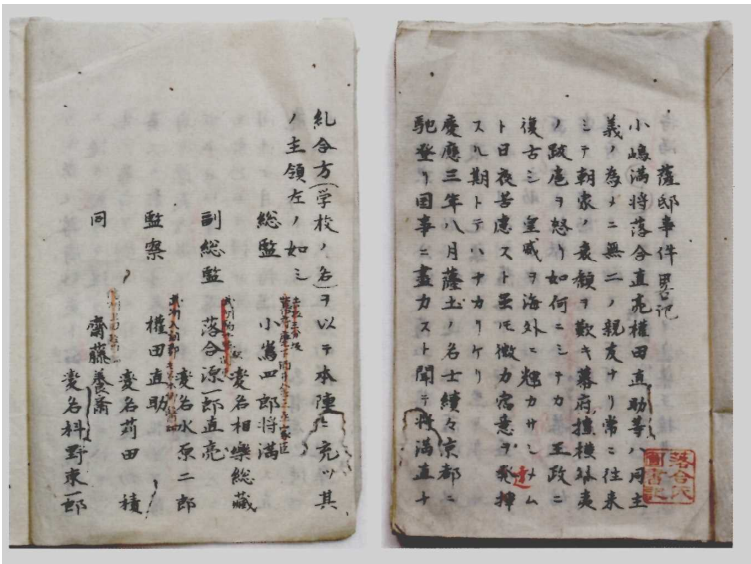

図１．「薩邸事件略記」[2]（文中の「B」の資料）

一方、薩邸事件略記について調べてみると、『相楽総三関係史料集』[3]という刊本の中に「薩邸事件略記」という一章のあることがわかった。

この二つの「薩邸事件略記」はどういう関係にあるのか気になったので、調べてみることにした。

（二）『相楽総三関係史料集』の「薩邸事件略記」

『相楽総三関係史料集』の中の「薩邸事件略記」を「A」としよう。

「A」の概要は、西郷隆盛の関東擾乱策に乗って小島将満・落合直亮・権田直助等が薩摩藩邸に集まり浪士を中心に隊を作る処から、関東周辺の攪乱作戦、幕府側による薩邸焼き討ちと浪士の脱出、西郷との面談などが略記されている興味深い内容であった。この中に権田直助の名は最初の方に三ヶ所、終わりの方に一ヶ所出て来る。

因みに、小島将満は相楽総三のことで後の赤報隊の隊長、落合直亮は八王子駒木野の小仏関所の関守の家系で、直亮・直澄・直言の兄弟三人は国学を学び共に討幕運動に関係している。

この資料の最初の部分を参考に挙げてみよう。

「小島将満、落合直亮、權田直助等ハ同主義ノ為メニ無二ノ親友ナリ、常ニ往来シテ朝家ノ衰頽ヲ歎キ、幕府ノ専横、外夷ノ跋扈ヲ怒リ如何ニシテカ王政ニ復シ皇威ヲ海外ニ輝カサシメムト日夜苦慮スト雖モ微力宿意ヲ達スル期トテハナカリケリ。慶應三年八月薩士ノ諸士續々京都ニ馳上リ國事ニ盡力スト聞テ将満直チニ上京シ錦小路其他公卿及薩士二藩ニ往来シ西郷吉之助ト結ビ遂ニ江戸薩邸ヲ以テ浪士ノ屯集所トスルニ至レリ。

（略）

同年十月上旬将満京都ヨリ下向ス直亮直助等ト謀ル所アリテ、諸有志ノ徒ヲ引卒シテ江戸芝三田薩邸ニ屯集シ糺合方（学校ノ名）ヲ以テ本營ニ充ツ其主領左ノ如シ

総　監　小島四郎将満　變名　相樂総蔵
副総監　落合源一郎直亮　仝　水原二郎
大監察　權田直助　仝　苅田積（穂）ナリ[注1]
同　齋藤養斎　仝　科野東一郎
総人員凡五百人出入不定

此時薩ノ本藩ハ大概帰國又ハ上京シテ止マルモノハ僅カニ留守居添役關太郎外二三十人ニ過キズ貴重ナル財貨ハ悉ク輸シ去リ僅カニ数千金ト木石其他雑貨ノ運搬ニ不便ナルモノヲ残シ置浪士ノ軍資ニ充ツ（以下略）」

というような内容である。これだけでも当時の様子がかなりわかるようである。

さて、「A」の出典を調べてみよう。

『相楽総三関係史料集』の「書目解題」には、「木村亀太郎氏（筆者注、相楽総三の孫）蔵　これは落合直亮が後年手記して家に残し置きたるもの（落合家には今原本なし本巻は木村家の写による）」とある。

つまり、落合直亮（明治28年没、67歳）が後年（維新後、但し何時かは不明）、記憶をたどって「薩邸事件略記」を作成したが後に所在不明になった。落合の作成したものを写し、それが活字になって「A」になったと解釈できる。

これを裏付けるように「草莽落合源一郎覚書」[4]（高木俊輔、『東国民衆史』第5号）の（注9）に、「落合が残した手記に『薩邸事件略記』がある。人名録は丹念に記した原本があったというが、薩邸焼打事件の時品川方面へ逃げる途中で失くしてしまったという。後になって記憶をたどって作製した仮人名録と『薩邸事件略記』は、ともに相楽総三の孫にあたる木村亀太郎が写して置いたものが、現在下諏訪博物館に所蔵されている。なお、落合の原本は、ともに今は見られない」、とある。写した時期は不明だが、木村亀太郎は明治22年生まれなので、少なくとも

明治40年以降のことだろう。

なお、写しが下諏訪博物館（筆者注、現在「下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館」）に所蔵されているとあるので同館に問い合せたり、また訪ねたりしたが残念ながら確認できなかった。

（三）八王子市郷土資料館の「薩邸事件略記」

それでは八王子市郷土資料館の「薩邸事件略記」（この資料を「B」とする）はどのような資料なのか。まず八王子市郷土資料館にお願いしてコピーを入手した。資料の全体はB4版で19枚（原文18丁）。このうち「薩邸事件略記」は15丁余りで、残りは「徳川前将軍ヨリ万石以上へ達シノ写」等の付足りである。

本文は修正追記などが多く、ちょっと読むのに苦労する。そして本文に入る前には、

「浪士は義士ニ改ムへし」

とある。これは直亮の思いの表れか、それとも直澄の気持ちか迷うところである。そして本文の最後には、

「以上磯崎伍太郎ニ命シ筆記セシム」

とある。さらに後文に

「今日二十餘年の昔時ヲ懐回顧スルニ夢ノ如シ薩邸事件の如き其顚末を詳にするものなし然してその主領たるもの獨直亮の存在せるのミ茲にその顚末の亡ひむことを惜しミ聞可るまゝにその大畧を記し置くもの也

明治二十三年十月　落合直澄」

とある。

後文は、明治二十三年十月に直亮の弟直澄（国学者、明治24年没、51歳）が、存命中の直亮に聞き書きしたという意味であろう。直亮六十二歳、直澄五十歳の時である。

本文に修正追記などが多いのは、思い出しながら喋った内容を書いたことによるのかも知れない。また本文と修正追記の字体が異なるように思える。「磯崎伍太郎ニ命シ筆記セシム」とあるから本文は磯崎伍太郎に筆記させ、修正追記は直澄が行ったのではないか。磯崎伍太郎はどのような人物か不明だが、直亮、または直澄の門人か関係者だったのだろう。後文と修正追記は字体が似ていて直澄の筆によるものの可能性大である。

追記の中には、少し長文の力士陣幕久五郎のこともある（薩摩藩お抱え力士の横綱陣幕久五郎が薩邸焼打ちの急報を京都の薩摩藩邸に届けようと努力したこと）。これには（明治廿三年十二月一日ノ讀賣新聞）と記述されているから新聞記事を見ての追記であろう。字体はこれも素人判断だが直澄本人によるように思える。

特徴的なのは、主領の名前に住所肩書が添えてあることだ。例えば直助の場合、「武州入間郡毛呂本郷醫師」とある。但し朱色の取消と思われる線がある。具体的には次のようにある（図1参照）。

総監　赤坂三分坂幕府醫師酒井金之丞家臣　小嶌四郎将満　變名　相樂総蔵

副総監　武州駒木野駅関東　落合源一郎直亮　變名　水原二郎

監察　武州入間郡毛呂本郷醫師　權田直助　變名　苅田　積

同　信州上田醫師　齋藤養斎

變名　科野東一郎

ところで、実は八王子市郷土資料館には薩邸事件関係の史料が、「B」の他にもう二編あることが後にわかった。その一つは「江戸薩邸事件略記」であり（これを「C」とする）、もう一つは「薩邸事件」である（これを「D」とする）。これら三編は何れも落合家文書である。

「D」は17丁で、作成時期作成者とも不明だが、書き方・内容とも少々雑で、「B」に比べれば抜けの個所も多い。ここでの論評の対象外とする。

「C」は19丁で、本文の他に、「B」と同じ追加（付足り）、それに小島将満・権田直助・斎藤養斎・西山謙之助・小川節斎（竹内啓）・落合直亮の略歴が書かれている。

また「B」にある「浪士は義士ニ改ムへし」「以上磯崎伍太郎ニ命シ筆記セシム」はない。後文は、

「今二十餘年の昔時を回顧するに夢の如し薩邸事件の如き其顚末を詳にするものなし然してその主領獨直亮の存在せるのミ茲にその顚末の亡ひむことを惜しミ聞可まゝにその大畧を記し置くもの也

明治二十三年十二月　落合直澄」

というものである。

これは「B」の後文より少し簡潔になっている。「C」の本文内容を見ると「B」を改めて清書したものと思える。字体も素人判断だが「B」の追記と同じで直澄のもののように思える。十月に聞き書きし、清書が終わったのが十二月と推測できる。この史料はきちんと和綴じされていて昭和三十年十一月二十五日の日付がある。

なお、権田直助の略暦は次のように書かれている。

「武州入間郡毛呂本郷ノ醫ナリ平田派ノ学ヲ学ヒ皇朝古醫法ヲ以テ其名高シ薩邸事件後刑法官監察司知事及大学校博士ニ仁セラル後相州雨降神社祠官兼大教正ニ終ル」

（四）各資料の関係

「C」は「B」の清書版とすると、「A」と「C」はどういう関係なのか。

既述の力士陣幕久五郎のことは「A」にも「C」とほぼ同じ文章として出現する。このことは「A」の原本の作成は少なくとも新聞記事の出た明治二十三年十二月一日以降ということになる。それと「A」と「C」との酷似性（文章の細部まで殆ど同じ）からすれば、「A」の原本は「C」を元にしたとしか考えられない。既述のように「A」は「落合直亮が後年手記して家に残し置きたるもの（落合家に原本なし）」とある一方、「C」は直澄の直亮からの聞き書きと思える。両者は明治二十三年十二月一日以降の成立でしかあり得ないが、直澄に喋ったことが纏められているのに、直亮が亡くなるまでの五年間にさらに自分で「A」を書くようなことがあるのだろうか。

「C」は「A」に比べ新漢字が多いということや、幕側と交渉した名前が「A」は「関太郎」とあるのに「C」は「関一郎」とある（但し「C」には「関一郎」が三個所あるが、その内一個所は「一」を消して「太」としている）のは、「A」の原本を「C」とする場合の難点であるが、「A」の印刷時に修正した可能性や木村亀太郎の写し間違いなどもあるかも知れない。

筆者の推論は「A」の原本は「C」ではないかというもので、「落合直亮が後年手記して」というのは何かの間違いかと思い

たいのだが。

（五）「江戸薩邸事件略記」の文章

最後に参考に「C」の前半部分と、後半部分を挙げてみる。なお薩邸事件については文献（5）が詳しい。

【前半部分】（浪士隊結成まで）

薩邸事件畧記

小嶌将満落合直亮権田直助等ハ同主義ノ為メニ無二ノ親友ナリ常ニ往来シテ朝家ノ衰頽ヲ歎キ幕府ノ擅横外夷ノ跋扈ヲ怒リ如何ニメカ王政ニ復古シ　皇威ヲ海外ニ輝カサシメムト日夜苦慮スト雖モ微力宿意ヲ達スル期トテハナカリケリ

慶應三年八月薩士ノ諸士續々京都ニ馳登リ國事ニ盡力スト聞テ将満直チニ上京シテ錦小路其他公卿及薩士ニ藩ニ往来シ西郷吉之助ト結ビ遂ニ江戸薩邸ヲ以テ浪士ノ屯集所トスルニ至レリ

（略）

同年十月上旬将満京都ヨリ下向ス直亮直助等ト謀ル所アリテ諸有志ノ徒ヲ引卒シテ江戸芝三田町薩邸ニ屯集シ糺合方（学校ノ名）ヲ以テ本営ニ充ツ其主領左ノ如シ

総　監　小島四郎将満
　　變名相樂総蔵
副総監　落合源一郎直亮
　　變名水原二郎
大監察　權田直助
　　變名苅田　積
同　斉藤養斉
　　變名科野東一郎

総員凡五百人出入不定

此時薩ノ本藩ハ大概帰国又ハ上京シテ止マリタルモノハ僅ニ留守居添役関太郎外二三十人ニ過キス貴重ナル財貨ハ悉ク輸シ去リ僅カニ数千金ト木石其他雑貨ノ運搬ニ不便ナルモノヲ残シオキ浪士ノ軍資ニ充ツ（以下略）」

【後半部分】（薩邸が襲撃されて浪士たちの脱出から）

浪士全隊品川駅ニ至ル駅頭ヲ放火シ追跡ヲ防ク浪士中品川ノ者アリ曰ク此ハ我家ナリ放火スル勿レト曰ク今日家アルモ何ニカセムト先ツ其家ヲ火ニス衆手ヲ拍テ笑フ

將滿直亮等妓樓ニ入ル樓中人ナシ唯酒肴ノ累々タルヲ見ル曰ク天吾輩ヲ慰セムトスル者ノ如シト衆喜テ数杯ヲ傾ク此時幸ニ薩ノ鳳翔丸碇泊セリ

鳳翔丸ハ本藩ノ殘士引揚ケノ爲メニ來レルナリ廿日ニ出帆スヘキナリシガ都合アリテ廿八日出帆ト延期シテ不慮ニ浪士ノ所用トナレリ

端舩数艘ヲ出シテ本舩ニ投ス此時砲臺碇泊ノ開陽丸（幕府ノ軍艦）黑烟ヲ上クルヲ見ル驚キテ本舩ヲ発ス後出ノ一艘ハ本舩ニ達スル能ハス還テ羽根田ニ着ス

此徒岩波御篤岩谷鬼三郎等數十人道ヲ相州大山ニ取リ御殿場ニ出テ散乱ス戸宮十郎農兵ノ爲ニ砲撃セラレテ死ス原三郎小川香魚（ほう）松田正雄立川衡等本国川越ニ還リ領主ノ爲メニ追撃セラレ或ハ割腹シ或ハ斬首セラル

鳳翔ハ小軍艦ニシテ開陽ハ幕府最大軍艦ナリ強弱比スベクモ非ス觀音崎ニ至ルニ及テ開陽ハ我ヲ越エテハヤク艫頭ニアリ逆ニ我ヲ砲撃ス我之ニ應ゼズ貫射セラル、コト二十餘発帆柱折レ機械損ジ浸水甚シ今ヤ進退窮マレリ徒ラニ魚腹ニ葬ラレムヨリハ

寧ロ開陽ニ乗移リ討死スルニ及カズト徐々ト進航シ稍近クニ及ビ十分ノ度ヲ量リ発砲スル三回皆的中ス伊牟田尚平舷ヲ叩テ躍踊ス開揚周章逃ケ去ル

此時開揚ノ軍師ハ榎本釜二郎ナリシ砲丸皆機關ニ的中セルヲ以テ引回セルナリト云フ薩ノ軍師ハ伊牟田正平ニシテ其運動悉ク同氏ノ指揮ニ出ツ

船中砲丸ノ爲メニ宮林亀藏両足ヲ失テ死ス此夜下田港ニ泊シ損所ヲ修繕ス翌廿六日発船遠州灘ニカヽル黒雲天ニ漲リ暴風浪ヲ揚ケ危嶮甚シ然ナキダニ破船自由ナラザルニ此難ニ逢ヒ忽チ東南ニ吹流サレ八丈島黒瀬川ノ近傍ニ漂フコト二晝夜陸戦ニアリテハ一夫百夫ニ當ラムト誇リシモ今ハ唯存亡ヲ天ニ任セテ云甲斐モナク皆船底ニ打倒レテ起ツ者ナキニ至ル

此時開揚再ビ追跡スト雖モ其所在ヲ探求セズシテ還ルト云フ廿九日本船紀州尾鷲組九木浦ニ着ス村民注連引キ餅搗キ正月ヲ迎フ老若集テ云此頃江戸ニ浪人騒動アリアナ恐ロシキ事共ナリ云々ト誰カ此等ノ人物皆浪人ナリト知ラムト衆笑フ落合直亮伊牟田正平坂田三四郎ノ三名此所ヨリ陸路ヲ伊勢大和ニ取リ昼夜兼行シテ上京ス

慶應四年正月三日山城長池駅ニ着ス此時既ニ伏見ノ戦争起ラムトス通行甚タ苦ム道ヲ宇治ニ取リ稲荷山ヲ越エテ京ニ入ル

四日直亮等西郷吉之助ニ面シ關東ノ顛末ヲ演ス氏喜テ曰ク予去月三十日二江戸藩邸ノ事件ヲ聞ケリ予ハ昨三日ノ戦争ハ遂ニハ起ルヘシトハ推考セシカドモ此ノ如ク速カナラムトハ思ハザリキ然ルニ此戰争ヲ早メ徳川氏滅亡ノ端緒ヲ開キタルハ実ニ貴兄等ノ力ナリ感謝ニ堪ヘスト

此時本船ハ神戸ニ着セリト雖トモ會藩ノ爲メニ擁撃セラレテ上陸スル能ハズト聞テ應援ヲ西郷氏ニ乞フ兵寡シトテ應ゼズ將満等長藝二藩ノ應援ヲ得テ上陸スルヲ得タリ

五日將満上京ス是ヨリ先キ去十二月中権田直助ハ江戸薩邸ヲ脱シ門人宮西諸助ヲ従ヘテ上京シテ五條家ニ寄ル共ニ万死ヲ免レテ弥々王政復古ノ時ニ逢ヘルヲ賀ス

薩邸事件ト同時ニ原田七郎同志ヲ募リ兵ヲ豊後ニ挙ケ日田陣屋ヲ屠ラムトシテ失敗シ七郎縛ニ就キ大阪ニ護送セラル船中幕吏七郎ヲ汽罐ノ傍ニ繋キ焼キ殺スト云フ七郎ハ小倉藩士原田重枝（本居門人かへしの風の作者）ノ弟ナリ長ク関東ニアリ直亮等ノ同志ナリ

（注１）『権田直助翁詳傳』[6]には「変名苅田積穂」とあるが、「大監察」の記述はない。同書は直助研究の根本資料といわれる。

（注２）飯能の天覧山の登り途中に小川香魚と父の小川松園の碑がある。松園の碑文は直助によるもので明治八年十月。碑文の後半に次のように香魚のことが刻されている。

「（略）一男を香魚といふ。又世の大義を知れり。同（慶応）三年といひける年の冬、世の忠士等と共に国のため君の御為、益荒雄のとき心振起し勤めけるに命かひなく敵軍に取圍まれ、同年の十二月の廿六日、年二十二にして入間郡三芳野郷なる岸村と云ふ所にて打死して世に誉を遺したりけり。（略）明治八年といふ年の十月の末つかた　権少教正　源権田直助誌」

また、香魚の碑文は鷹州織田完之（歴史学者）によるもので大正二年十二月建立。薩邸焼打ち時の脱出と幕府に通じていた侠客を討ち果たしたこと、農兵に包囲され自刃したことなどが刻されている。

二、ある紀行文にみる逸事

筆者の住む羽村市の図書館で『東国民衆史』という雑誌をたまたま見たのは五、六年も前のことだった。この雑誌の主催者は羽村の桜沢一昭氏で、中里介山の研究者としても知られる人。その雑誌の四号から十号までの七回に渡って桜沢氏は「覚書・権田直助伝」を連載している。昭和55年から59年のことである。今年（平成28年）になって改めて読んでみたが、質・量とも優れた権田直助の伝記である。

その連載の二回目に府中大國魂神社（六所宮、くらやみ祭りで有名）の神官で国学者・歌人でもある猿渡盛章（さわたりもりあきら）（一七九〇～一八六三）の紀行文が紹介されている。[7] それは、「漫遊雑記」と題するものの中の高麗入間を旅したときの一部で、安政三年（一八五六）九月のことである。この旅で猿渡は権田直助の家に二泊している。

図２．小川香魚の碑
（飯能市・天覧山登り途中）

記事は当然盛章が感じたことで占められていて直助の考えなどは出て来ないが、直助を知る傍証としては役立つものである。改めて「漫遊雑記」の資料を入手した上[8]で、どのような旅だったのか述べてみたい。まず概要は次のようなものである。

安政三年九月廿二日盛章は府中を発ち、途中下新井（所沢）を経由して廿四日に上鹿山（日高）の八剱明神（現在の高麗川神社）に到着、神官田中能登と野々宮明神の高尚主殿に迎えられる。ともに六所宮とは昔からの関係があるようだ。翌廿五日は近くで過ごし、廿六日は多和目の知り合いが来て高麗の聖天院に行く。そして廿七日は多和目から毛呂本郷に入り、権田直助を訪ね主殿・能登と共に権田宅に止宿。廿八日は葛貫村の住吉明神の宮崎縫殿之助も加わり、大谷村（越生）の「おほやかはら」に赴き、戻ってこの日も権田宅に泊まる。廿九日は毛呂の飛来明神・八幡宮の祭礼（流鏑馬）を見学後権田直助と別れ、葛貫の嘉元の板碑など見学。その後は野々宮・新堀村・女影村などを経由して十月三日に帰宅している。

少し詳細にみてみよう。まず、二十七日の原文から。

「廿七日昼餉過して此里なる重勝庵へ立寄るこハ河村氏か祖先三代を葬りたる所にて庵にハ代々の纂牌を収めたり香花など手向れバ尼僧出逢て茶をすゝむそこより毛呂本郷*権田直助がり志し出たつ主殿能登貞之丞従ひ来つ其夜ハ権田氏にやどりぬあるじハかねて田中河口などより名刺送りたりし人にて皇国の医法を弘むる事に深く心をよせ古学のすぢをもいとよく意得たりねもころに饗（アルジ）して夜ふくる迄語らひてふしぬ

＊〔追記〕按に毛呂ハ往昔諸ノ君の程なとの住ける地ならむか猶考べし」

前半の河村氏云々は盛章の妻の実家に関係することらしい。「田中河口などより名刺送りたりし」はどういうことなのか筆者には不明。この日の「其夜ハ権田氏にやどりぬ」とあり直助宅に泊まっている。

二十八日は直助と宮崎縫殿之助の案内で、万葉集東歌ゆかりの地である大谷村の「おほやがはら」に遊ぶ。歌は次のようなものである。（万葉集 巻十四の3378）

伊利麻治能 於保屋我波良能 伊波為都良
比可婆奴流奴流 和尓奈多要曽祢
（いりまじの おほやがはらの いわいつら
ひかばぬるぬる わになたえそね）

後述するように、この「おほやがはら」の場所は諸説ある。

「廿八日かねて海東関左がかたらひたる万葉集なるおほやかはらハ大谷村をいふなるべしといへる事の耳にとゝまれるを其旧蹟尋ねまほしく権田直助宮崎縫殿之助（葛貫村諏訪明神祠官）主殿貞之丞など伴ひて平山上野越生和田村など打過て大谷村に至るこゝハ比企郡の界なり」

「（葛貫村諏訪明神祠官）」とあるのは住吉明神の間違いだろう。続いて万葉集東歌に入り、徐々に詳しくなる。

「此あたり岡の間ハ稲田長くつゞきてそこをおほやかはらという岡伝へに深く分入れは高砂といふ地（池カ）あり水の面ハ沼縄すき間もなく生しげれるを此地の方言にイワツツラといふ是なん万葉にいはゐつらとよめる物ならむとぞ里人語伝へたる其地より少しく山田を隔てゝ大亀の沼といふもありこハ高砂池より大にしてこゝにも蓴菜（ヌナハ）を生せり昔ハひとつゞきの沼なるべく覚ゆ按に万葉武蔵歌に

入間路のおほやかはらの伊波（イハ）為（キ）づらひ
かばぬら（る）〳〵わになたえそね

と見え同じく上野歌にかミつけぬかほよが沼のいはゐづらともよめり此外古歌どもにも聞えず名義も詳（サダカ）ならす師説に何れにもあれ水中にはひひろごれる蘰草なり」

現在、大亀沼（越生町大谷）の脇には「大谷ヶ原萬葉公園」の看板が立つ。「高砂」の地名も詳細な地図をみるとある。猿渡は「イワツツラ」は土地の言葉であり「いはゐつら」に繋がると言い、沼縄（ぬなわ）は蓴菜であり蓴菜（じゅんさい）と言う。

歌は男女の仲を女の側から詠んで、入間路にある大家が原のいわい蔓のつるを引けばぬるぬる続くように私との仲を絶やさないで欲しい、というもの。上野歌というのは調べると巻十四の3416に類歌「上つ毛野可保夜が沼のいはゐつら引かばぬれつつ我をな絶えそね」のことで、どちらかの歌が影響して別の土地で歌われたのではないかとのことらしい。

このあと盛章は「いはゐつら」についてさらに詳しく述べているが、筆者に解説する能力はないので掲載のみとする。

「伊（イ）ハ発語にて為（キ）ハ此（ヒ）の通音なりそハ大炊（オホキ）ノ寮ハ大火（オホヒ）ノ司の義なるべきに和名抄に於保為（オホキ）乃豆加佐（ノツカサ）とかき神楽歌に円居（マトキ）を満登比（マトヒ）法華験記に山城ノ国の神奈備（カミナビ）を神奈井（カミナキ）旧本今昔物語に

池のそこひを底井（ソコヰ）とも書き堀河百首頼政集などに逢初（アヒソメ）に藍染（アヰソメ）をよせ平家物語鵠（カ）の段源平盛衰記三位入道ノ歌の脱明日井集などに椎（シヒ）に四位（シヰ）をよせ夫木抄鷹ノ部源ノ仲正が歌後拾遺左大臣の歌などに鷹の木居（コヰ）を恋によせしたぐひいと多かるもひが事にハあらずといはれしによりて波為（ハヰ）ハ這（ハヒ）にて水の面に蔓のはひゝろごれるより負し名とする時ハ名義も明らかなり」

盛章は大家が原の地名にも言及し、大在家村（大家村か？）か、この大谷村かと決め兼ねている。最後は自分の歌でしめくくっている。

「さておほやかはらハ和名抄入間ノ郡ノ郷名大家ハ於保也介（オホヤケ）とも見え今も此郡にある大在家村といふならむか此大谷村の事ならむか詳（サタカ）にハ究めかたし此大谷てふ里おほやかはらならむにハ彼いはゐつらとよめるハ蓴菜（ヌナハ）の別名ともいひつべし

入間路にありときくなるいはひつら
はひかくれても年をふるかな」

因みに「おほやがはら」の諸説の場所にはそれぞれ碑が建っている。日高市大谷沢（碑は平成元年建立）、坂戸市森戸（同昭和五十七年）、越生町図書館前（同平成八年）であり、それぞれこの地こそと主張しているようである。また狭山市役所の庭にも大きな碑（同昭和六十一年）がある。

盛章らはこのあと和田村（越生町西和田）に入り、内裡明神（春日明神）を訪ね、内裡山という小山に登る。そこで奇事を経験する。現在の春日神社から琴平神社あたりである。両神社の間は今は八高線が通っている。『風土記稿』[9]には「春日社」は「内裡明神」とも称したとあるが、「金比羅」のことは書かれていない。『風土記稿』が書かれた化政期にはまだ現在の琴平神社は無かったのかも知れない。小山の頂上に琴平神社がありこれが内裡山だったのだろう。麓の登り口には「金刀比羅大権現」の標識がある。

「こゝの農家に権田氏がゆかりのものありとて立寄るに盃とうてゝ人々も休らへり又こゝに隣れる和田村といふに里人内裡明神とも春日明神ともいふ社あり霊実（ミタマジロ）ハ脇差やうの古刀なりとぞ翌ハ祭祀ありとて里人あまた集ひ居たり社の傍に騎射の馬場あり此馬場より登るひとつの山あり高さ八九間ほどもありぬべし是を内裡山ともよぶ上古の古墳などのさましたり乙辺川に添たる所なり俚談にむかし高貴の人のさすらひて此所に住給ふ所なりといふ攀登れバ山上に金比羅の祠有さて此山上にひとつの奇事あり彼金比羅の祠のほとりに二三尺或ハ四五尺もあるべき石かなたこなたに打ちりたる其中なる一の石の上に針盤（ジンヤク）を居れハ其針盤方をさす事能ハずといひ伝へたりいとあやしく思ひて縫融之助か携へ来れる針盤を出して試むるに里人らがいへるが如し其石より八九尺或は二間ばかりも離れて試れバ常の

図３．万葉の歌碑（日高市大谷沢）

ことく用をなすいかなる放ともしられず奇といふべしこよひも権田氏に帰りてやとりぬ」

高貴の人とは誰か。春日神社境内には「藤原大納言遠峯・季綱邸蹟」と刻した碑があり、『風土記稿』には「藤原季綱舊跡字内裡にあり、此地昔藤原季綱が配せられて謫居せし所なりと云、季綱後に横見郡吉見領御所村へ移りしと云傳ふ、然に土人は季綱親王と號するは全く誤なるべし、（略）おもふに越生氏の祖、大納言藤原遠峯などの邸蹟などにや」とある。また『風土記稿』には誤りとしているが毛呂太郎の記述もある。ここでは深入りは止めておこう。

奇事とは「針盤」が狂うことである。石(岩)には磁鉄鉱か何かが含まれていたのだろう。筆者は登山用コンパス（磁石）を持って琴平神社に行ってみた。鳥居の前方（南西）には直径50～100㎝位の石(岩)が点在するが、どの石の上にコンパスを置いても正常に方位を示した。が、小社の裏側にある少し大きな岩の上にコンパスを置いたら、明らかにおかしな示し方になった。北を指すべき針が西や南西を指し安定しない。記述が少し裏付けられた格好になった。なるほど……

さて、この日は権田宅に泊まる（二泊目）。翌二十九日は流鏑馬祭りで、盛章は「古雅なる事に覚ゆ」と綴っている。直助との別れを惜しむ。

「廿九日秋のかきりもけふあすとなりぬ毛呂のやどりを立出る時に

野に山にこゝろをそめし秋もあれと
別れをしきハ君か宿哉

けふハ此里の産神(ウフスナ)飛来明神八幡宮両社の祭礼なりとて里のうちいとにぎはし権田氏が道しるべにて先社頭へ詣づ神主ハ紫原伊勢といふ圭田十石を賜ふ此辺の村々より鞍馬三匹を出し其年の役に当りたる里人競馬また騎射をとり行ふ近隣の里より詣る人道もさりあへず此あたりの神事なりといへり立夫らむとする頃彼競馬のもの来れり古雅なる事に覚ゆ」

ここの説明は不要だろう。祭礼は流鏑馬祭りである。流鏑馬の後は葛貫村の「嘉元の板碑」の見学をし、いよいよ直助との別れである。

「さて畑中のミちを右の方へ入れハいと大なる青石の板碑たてり高さ壱丈ばかり幅弐尺五寸程上に梵字あり中に嘉元四季二月三日時正敬白とありて左右に二行づゝに細字あれど皆までハ老眼にハよみかねたり大字ハ草書にて頗る古雅也めつらしき大碑なりすべて此あたりふるき地なれバ古碑などハかなたこなたにいと多けれどなべてなるハ書もとゞめずこゝにて直助にわかれ葛貫村住吉明神に詣づこも小社ながら旧地とおぼし神官宮崎縫殿之助が家ハ社の傍にありきのふ契置たれば下まつ頃にてねもころにあるじせりとかくして夕さりがた野々宮に帰りきよめる歌

うれしくもむすふかりねの枕かな
千くさ花咲野の宮の秋」

このとき、盛章六十七歳、直助四十八歳。ここでは直助の言葉などは出て来ないのでどのような思いでいたのかは不明。二人の関係は国学での結び付きがあったのだろうが、この後の二人の関係も不明である。盛章は開明的で国際情勢にも関心を持

ち、嘉永六年のペリー艦隊来航の年の十二月には寺社奉行安藤長門守宛てに開国論を上申[10]したというから、尊王攘夷の直助とは少し立場が異なったことが影響したかも知れない。

そして直助について言えば、「くすしの一言[11]」で、「何の醫流（クスシブリ）にても、其ノ術（ワザ）を得れば病癒（ヤマヒイエ）、其ノ術得ざれば癒ず。又如何に術は得たりとも、運命の限れらむをば爲方（セムスベ）の無キものなれば、能ク心を平かにして（タヒラ）世間（ヨノナカ）の萬ヅの事に比校（オモヒクラベ）て、専ラ君親に事フる心を先として、醫（クスシ）の業は爲（ナス）べきなり」と述べて皇国医道を勧め、「武蔵野草醫源権田直助述」と署名したのは猿渡盛章が旅した翌年のことであった。

（平成二八年初稿、令和元年十月終稿）

参考文献

（1）「薩邸事件略記」「江戸薩邸事件略記」「薩邸事件」（八王子市郷土資料館蔵落合家文書）
（2）『幕末の八王子―西洋との接触―』（八王子市郷土資料館平成26年）
（3）信濃教育会諏訪部会『相楽総三関係史料集』（合同出版、初版昭和14年、復刻昭和50年）
（4）高木俊輔「草莽落合源一郎覚書」（『東国民衆史』第5号）
（5）長谷川伸『相楽総三とその同志』（講談社学術文庫2280）
（6）『徳育資料第二編　権田直助翁詳傳』（国立国会図書館デジタルコレクション）
（7）桜沢一昭「覚書・権田直助伝（二）」東国民衆史5号、昭和56年
（8）府中市教育委員会『猿渡盛章紀行文集』府中市郷土資料集4、昭和55年
（9）『新編武蔵風土記稿』第九巻（雄山閣、昭和56年）
（10）府中市教育委員会『新版府中市の歴史』（平成18年）
（11）権田直助「くすしの一言」（『国学大系第二十巻　権田直助集』、地平社版、昭和19年）

薩州屋敷焼撃之図（歌川国輝（三代）画、明治24年）

特別展「激動の幕末 in 練馬」
（練馬区立石神井公園ふるさと文化館、平成31年1月）より

（『あゆみ』第44号（令和二年四月一日）に掲載）